

ローカルに根付いた グローバル企業でありたい

リンナイは、ガスコンロや給湯器をはじめとする熱エネルギー機器のメーカーです。創業は大正9年。当時名古屋瓦斯（今の東邦ガス）に勤めていた内藤秀次郎と林兼吉が、給湯器、石油コンロなどを製造・販売する会社を立ち上げました。社名は林と内藤から1字ずつ取って「林内商会」。今のリンナイは、ここから始まりました。

台湾を皮切りに海外16カ国に進出しています。グローバル化を進めていますが、うちは現地生産、現地販売が基本です。ある国の人件費が高くなったから、人件費の安い別の国へ生産拠点を移そうという考え方はしません。それぞれの国の暮らしや文化に根ざした製品を、現地で雇用・生産し、現地で販売することが基本です。

将来への期待から 中川運河再生への支援を決断

今回、中川運河再生事業の一環として、名古屋都市センターが、文化芸術助成事業「ARToC10」をスタートされました。運河の魅力アップにつながるアート事業に取り組む団体への支援として、リンナイが毎年1000万円、今後10年にわたって合計1億円を寄付させていただくことになりました。

これも考え方は同じです。リンナイ本社が中川運河のすぐ近くで営業させていただいている。地域に根付き、地域に貢献することをめざすリンナイが、中川運河の再生事業に協力させていただくのは、当然のことです。

ここ数年、中川運河を魅力的にしようとする民間のアート活動も出てきましたが、当社も協力させていただきました。川沿いをきれいにして花を植える「コスモスプロジェクト」にも参加させていただいています。

ただ5～6年前までは本当に汚かった。私自身、何とかしなきゃと考えていたのです。

われわれ企業も 市民や行政と力を合わせ 名古屋を魅力的なまちにしたい



中川運河の水辺をきれいにする「コスモスプロジェクト」に参加するリンナイ社員

本社周辺の土地を買い上げ、きれいにすることも検討していました。そこへ都市センターからアート事業のご相談を受けたのです。魅力のある運河になれば、人はゴミを捨てなくなる。川をきれいにすること、魅力をつくり出すこと、両方同時に進める必要がある。中川運河に隣接する露橋下水処理場の改築など、水質浄化に対する名古屋市の取り組みを見ていると、景観にも配慮していて「将来に期待していいな、うちも協力しなきゃ」と思い、今回の判断になりました。

「行ってみたい」「歩いてみたい」 そんな名古屋になってほしい

私は28歳まで横浜で育ちました。だからネイティブな名古屋弁は話せません（笑）。外からの目で名古屋、愛知を見ると、まずモノづくりの拠点です。それから道路整備が素晴らしい。でも文化のイメージは弱いですね。

名古屋には、そこへ行って歩いてみたい、と多くの人から思ってもらえる街になってほしい。それから「歴史のある中川運河を歩いてみたい」「ときどきアートイベントもあり、芸術の香りもする」。そんな中川運河になってもらいたい。

名古屋都市センターは、まちづくりに積極的に関与されており、心強い存在です。でも、まちづくりは都市センターや行政だけでできることじゃない。市民も民間団体も、われわれのような企業も力を合わせて名古屋のまちをよくしていきたいですね。



リンナイ株式会社
社長

内藤弘康さん

ないとう ひろやす / 1955年生まれ。
東京大学工学部卒業。日産自動車機構設計部を経てリンナイ入社。2005年、社長就任。人工知能研究振興財団理事、リビングアメニティ協会会長、日本ガス石油機器工業会副会長。